

安藤昌益の精神医学

岡田靖雄

安藤昌益は謎の人である。この「忘れられた思想家」(E・H・ノーマン)の著、稿本『自然真営道』全一〇〇巻中九三冊を一八九九年に入手したのは、やはり謎にみちた生涯をおくった哲学者、そして市井の美術鑑定人の狩野亨吉である。あまりに革命的なその内容を狩野は「狂人の作でないか」とうたがい、それを呉秀三にあずけたが、狂人の作にあらずとの返事をえて、よみかえしたといわれる。

安藤家は出羽国秋田郡二井田村(現秋田県大館市)の豪農であったが、昌益が生まれた一七〇三年(元禄一六年)ごろには離散していたらしい。昌益の生地も、かれの医学の師もわからない。上方でまなんだらしく、長崎にいったことがあるとも、江戸にいたことがあるともされる。一七四四―四六年には八戸城下(青森県八戸市)に町医として開業し

ていた。晩年には農民として二井田村にうつって安藤家をつぎ、農民や全国各地からの門弟にたいし、革命的・弁証法的な唯物論哲学、自然真営道をとくこと五年。一七六二年(宝暦十二年)に死去した。

狩野は稿本『自然真営道』を東京帝国大学図書館にうつしたが、その半年後に大震災でそのほとんどが焼失した。しかし、かりだされていた一二冊のこり、また一九二四年に狩野は、原本の写本三冊を発見した。この三冊が『自然真営道』第三五―三七巻の「人相視表知裏卷」巻一―三である。この「人相」とは、人の心身の現象論であり、巻三には乱神病論がふくまれている。一九八三年に農山漁村文化協会から刊行された『安藤昌益全集』第六巻、第七巻に、この「人相卷」が書き下だし文の形ではじめて公表されたので、それによって安藤の精神医学をみたい。

巻一中の「面部ノ八具ヲ以テ、府蔵附着ノ八節序ヲ弁ズ、病根ヲ知ル 木病ヲ治ス大妙弁」には、「舌厚ク言イ不詳者ハ〔中略〕癲癩・眩暈病ミ易ク、狂氣・乱神病ミ易シ」などある。巻一―三から、癲癩・眩暈、狂氣・乱神のほかには精神疾患に関係する病名・症状名をひろうと、

邪祟（邪祟）、笑中風、哭中風、呻中風、健忘、醉狂（狂神病、乱志病）、遅言、頭痛、懺悔、驚悸などがある。乱神病論の総論部分には邪祟に相当する記載があるので、安藤は邪祟を乱神病の一症状としてみていたようである。狂気と乱神とは同義につかっただろう。そこで、安藤は精神疾患を、癲癇・眩暈、乱神病、醉狂、その他、とわけていたことになる。乱神病論では、「鬼邪病・是レ極陰ノ地、又ハ墓所等ノ陰氣ニ神舎傷レ、人事ヲ知ラズ、其ノ顔色枯蒼シ、一身ニ温氣無キ人相ナリ」などと、二四の病名があげられている。このようにみじかい記載なので、この鬼邪病にしても急性のものなら失神にあたるとも、慢性なら痴呆衰弱状態ともかんがえられる。

安藤のあげる順に、それが現在のなににあたるか推定してみよう。泥淫病（性的神経衰弱状態、脱神病（軽うつ状態）、妄神病（軽躁状態）、鬼邪病（失神？）、急切風（鎌いたち）、妄寢病（夢遊病）、恐鬼病（鬼形の幻視）、絶魂病（痴呆？）、進逆病（興奮状態）、退逆病（うつ状態—昏迷）、埋神病（心気症）、伏神病（？死）、平語病（？死）、重魂病（対話性独語ある分裂病）、離魂病（離人症）、分体病（二重身妄想ある分裂病）、

生靈病（極度の恋着・怨恨による心因反応）、死靈病（死者への恐れによる心因反応）、縊首病（自殺観念のつよいうつ病）、摧圧病（脳器質疾患）、溺水病（洪水恐怖）、嗜煙病（強欲な性格異常）、嗜雪風（？）、逆乳病（産褥変調）。

これらのうち、急切風、嗜雪風は乱神病としては不適である。いずれにしても、安藤が癲・癇・狂などの漢方医学の概念にとらわれずに症状記載していることは注目に値する。これらのすべてが安藤の実験からでているとはいえないが、安藤を、わが国の独自の精神医学の鼻祖といっているかもしれない。安藤が進退の互性（相互作用）を重視していたことからすると、進逆病—退逆病は躁うつ病記載の一步手前にあつたともいえよう。安藤は巻二では八情八神論という性格論を展開しているが、それと乱神論との関連はでていない。犯罪・刑罰について安藤は、かれが「法世」とよぶ階級社会の問題点をきびしく指摘したが、乱神論にはこの点の言及はほとんどない。

治方として安藤が乱神論の最後に、「薬力ノミヲ以テ治スルコト成リ難シ。故ニ理解ヲ以テ其ノ愚迷ヲ曉ラシメ、神知之レヲ得サシメ、慎ミ守ラシメテ、異薬ヲ加ヘ之レヲ

治ス。故ニ此ノ治方ハ理ヲ明カシ曉シテ之ヲ治ス」と、心理療法を重視していることも注目すべきである。

(東京)

江戸時代、東北地方鉱山の 煙毒(塵肺)

三浦 豊彦

江戸時代の東北地方には数多くの鉱山が存在し、多数の坑夫(金掘大工)が働いていた。こうした集団のなかに特徴のある病気が多発すれば、これに注目することになる。

煙毒とか、煙食い、煙、とかいわれたのは現在の塵肺で、この職業病で体がよわった有様から「よろけ」「掘だおれ」「疲れ大工」(大工 金掘坑夫)などともよんだ。

尾去沢の南西にあたるところに大葛金山があった。佐竹氏秋田着任以前からの金山で藩営の時期もあったが、寛政以来民営であった。

江戸後期の国学者、文人、歌人、紀行家、民俗学者でもあった菅江真澄(宝暦四(一七五四)〜文政一二(一八二九))が享和三年(一八〇三)五月に大葛金山を訪問している。真澄は鉱山師ではなかったが、彼の遊覧記にはしばしば鉱